

報告 旧南洋群島における歴史的建造物の残存状況と今後

辻原 万規彦*1

要旨：日本の旧植民地諸地域における歴史的建造物に関する研究はこれまでも数多く見られる。しかし、ミクロネシア地域に該当する旧南洋群島における歴史的建造物の調査は、ほとんど行われていない。本報告では、現在の北マリアナ諸島、パラオ共和国ならびにミクロネシア連邦などにおける日本統治時代の建造物の残存状況を報告する。米国との戦争により破壊されたものも数多いが、役所などの公共建築物、官舎や社宅、製糖工場跡、軍事施設跡ならびに港湾施設など、数多くの建造物が残存している。しかし、熱帯雨林気候の影響を受け、劣化の激しいものもあり、早急な診断・修復が必要であると考えられる。

キーワード：ミクロネシア、RC 建造物、レンガ造、軍事施設、産業遺産

1. はじめに

今日、リゾート地として知られるサイパンやパラオなどを含む地域が、第二次世界大戦終戦までの約30年の間、南洋群島と呼ばれ、日本の統治下にあったことを知る人は少ない。

日本の統治下または影響下にあった他の地域、すなわち朝鮮、台湾、「満州国」ならびに樺太と同様に、戦前期には、南洋群島でも、日本人による建築および建設活動が行われていた。しかし、他の地域とは異なり、これまで旧南洋群島における建造物に関するまとまった調査はほとんど行われてこなかった。

そこで、筆者らは、2001年7月より、旧南洋群島における建造物の現状を調査して地図を作成し、さらに多くの建築物を実測して図面を製作してきた。本報告では、これまで行ってきた調査を基に、旧南洋群島における歴史的建造物の残存状況を報告する。

2. 南洋群島の概要^{1), 2)}

1914（大正3）年、第一次世界大戦中に、日本がドイツ領ミクロネシアを占領し、この時からミクロネシアは日本の影響下に置かれることになった。1920（大正9）年には、国際連盟からミクロネシアに対する日本の委任統治が認められ、「南洋群島」を統治することになった。

「南洋群島」は、現在のパラオ共和国（Republic of Palau）、北マリアナ諸島（Commonwealth of the Northern Mariana Islands、サイパン島、テニアン島、ロタ島などを含む）、ミクロネシア連邦（Federated States of Micronesia、ポーンペイ（ポナペ）州、コスラエ（クサイ）州、チューク（トラック）州、ヤップ州を含む）ならびにマーシャル諸島共和国（Republic of Marshall Islands、マジュロ環礁、クワジェリン環礁、ヤルート環礁を含む）を含む地域であった（図-1）。1922（大正11）年には、南洋群島を統治する行政機関として南洋庁を設置し、その本庁をパラオに、支庁をサイパン、ヤップ、パラオ、トラック、ポナペならびにヤルートに置いた。1933（昭和

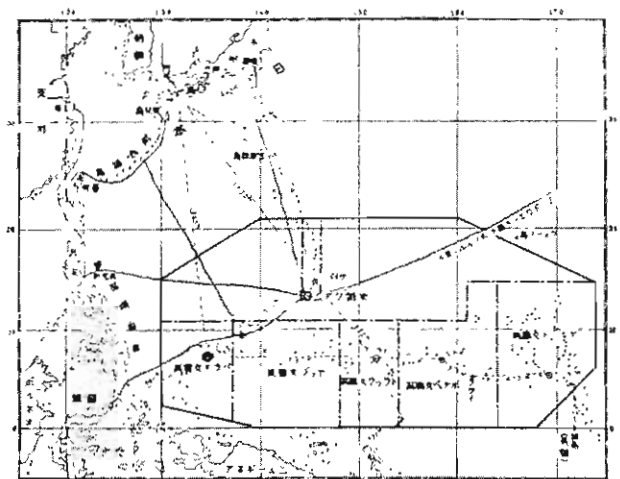


図-1 南洋群島全体図³⁾

*1 熊本県立大学助教授 環境共生学部居住環境学専攻 博士（工学）（正会員）

8)年に国際連盟脱退を通告した後も、日本による統治が続いた。しかし、1945(昭和20)年の第二次世界大戦の終戦に伴い米軍による占領が始まり、旧南洋群島は、1947(昭和22)年からは「太平洋諸島国連信託統治領」としてアメリカ合衆国による支配が始まった。その後、1970年代から90年代にかけて、紆余曲折を経て、信託統治が終了し、現在の4地域の政治的主体が確立した。

南洋群島は、北緯0度から22度、東経130度から175度に位置し、623の島からなり、面積は2,149km²であった。各地共に、月平均気温はおおよそ26℃から28℃であり、海洋性の熱帯気候または亜熱帯気候を呈している。なお、南洋群島内の一部の地域では、発生直後の台風により、甚大な被害を受けることもある。

3. 北マリアナ諸島・サイパン島に残存する構造物^{4), 5)}

3.1 北マリアナ諸島・サイパン島に残存する構造物の概要

南洋群島を統治するための行政機関である南洋庁の本庁はパラオに置かれたために群島内の政治的な中心はパラオであった。一方、サイパン支庁が置かれた北マリアナ諸島には、群島内最大の企業であった南洋興発株式会社の工場が建設され、群島内の経済の中心であった。南洋興発は、松江春次により設立され、製糖業を主な事業とする企業であり、同社が納める出港税が南洋庁の歳入の大半を占めることもあった⁶⁾。

北マリアナ諸島内のサイパン島に残存する日本統治時代の構造物は、大きく分けて、(1)チャランカノア地区に残る南洋興発関連の建築物とその遺構、(2)全島各所に残る軍事施設とその遺構、(3)その他、の3種類に分類できる。なお、(2)と(3)については、全てを網羅して調査できている訳ではない。

3.2 チャランカノア地区に残る南洋興発関連の建築物とその遺構

サイパン島南部の集落チャランカノアには、1923(大正12)年に、南洋興発(「南興」とも呼ばれる)が初めて建設した製糖工場があった。この工場は幾度かの改修や拡張工事を経て、終戦に至るまで同社の主力工場であり、工場周辺には、多くの社宅(写真-2, 写真-3, 写真-4, 写真-6, 写真-7)のほか、病院(の一部(推定), 写真-5)や酒保などが建ち並んでいた。

これまでの調査で、表-1の様な建築物とその遺構が残存していることが明らかになっており、そのほとんどを実測し、図面を作製した(表-1中の「写真」欄の番号は、本文中の写真番号を表す。)。社宅の中には、戦後、改修を行い、現在も住宅として使用されているものもある。また、「南洋興発事務所(写真-8)」は、近年まで民間会社の事務所として使用されていた。

「製糖工場・発電室(写真-9)」はマウント・カーメル高校が倉庫として、また「製糖工場・事務所?」(日本統治時代の用途は不明、写真-10)はカフェテリアとして使用している。これらの遺構の中には、建設後少なくとも70年以上も経過しているものもあるが、保存状態が良くないものも多い。

3.3 全島各所に残る軍事施設とその遺構

サイパンは、第二次世界大戦末期には、絶対国防圏の一翼を担ったこともあり、現在でも数多くの軍事施設の遺構が残っている。これらの

表-1 チャランカノアに残る建築物と遺構

種別	構造	残存棟数	実測	写真
教員官舎	木造	2	○	1
4戸建社宅	RC造	4	○	2
2戸建社宅	RC造	13	○	3
公衆トイレA	RC造	2	○	4
公衆トイレB	RC造	1	×	
興発病院もしくは興発倶楽部?	RC造	3	○	5
高級社宅*	木造+RC造	3	○	6
高級社宅基礎	RC造	1	×	
常務級社宅	RC造	1	○	7
南洋興発事務所	RC造	1	○	8
製糖工場・発電室	RC造	1	○	9
製糖工場・事務所?	RC造	1	○	10
水タンク	RC造	57	×	

*: RC造の応接室のみ現存

遺構については、北マリアナ諸島政府歴史保存局 (Division of Historic Preservation Office) がその全容を把握していると考えられる。

主なものとしては、各所の海岸に残るトーチカまたは砲台群 (主として RC 造, 写真-11, 写真-12) や現在のサイパン国際空港周辺に位置する旧アスリート飛行場関連施設 (主として RC 造) ⁷⁾ などがある。これらの中には観光名所となっているものもあり, また前述の歴史保存局も旧アスリート飛行場のガソリン貯蔵庫の一つを事務所として使用している。しかし, 保存状態が良くないものが多く, 天井や壁が剥落し, 腐食した鉄筋がむき出しになっている個所も数多く観察できる。

3.4 その他の構造物

第二次世界大戦の激戦地であったとは言え, また戦後 60 年以上経ったとは言え, サイパン島の各所には, 軍事施設以外の構造物も数多く残っている。全てを網羅できているわけではないが, これまでに観察したもののうち, 主なものとしては, 次のようなものが挙げられる。

旧タナバク港の背後に残る貯水池跡 (RC 造, 写真-13), ガラパン地区に残る旧南洋庁サイパン医院 (現在の北マリアナ博物館, RC 造平屋建, 写真-14), 同じくガラパン地区に残る刑務所跡 (RC 造平屋建) ならびに彩帆 (サイパン) 神社跡 (写真-15), パパゴ地区に残る八幡神社跡 (写真-16), などである。

このうち, 貯水池は 1928 (昭和 3) 年 3 月に竣工したものであるが, 上水道システムそのものがどの程度残存しているのかは不明である。

サイパン医院は 1926 (大正 15) 年に, 当時南洋庁庶務課 (後の土木課) の技手であった山下彌三郎 (後に技師昇格) が設計したものであり, 旧南洋群島に残る建築物のうち, 唯一設計者が明らかになっている。戦後長く放置されていたが, 1996 (平成 8) 年から 1997 (平成 9) 年にかけて改修工事が行われ, 1998 (平成 10) 年からは, 北マリアナ博物館として使用されている。



写真-1 教員官舎



写真-2 4戸建社宅



写真-3 2戸建社宅



写真-4 公衆トイレ



写真-5 興発病院?



写真-6 高級社宅



写真-7 常務級社宅



写真-8 南興事務所



写真-9 工場・発電室



写真-10 工場・事務所



写真-11 トーチカ 1



写真-12 トーチカ 2



写真-13 貯水池跡



写真-14 サイパン医院



写真-15 彩帆神社跡



写真-16 八幡神社跡

また、八幡神社の敷地内は、現在整備が進んでおり、近年、北マリアナ諸島政府の文化財に登録された。いくつかの階段のほか、灯籠2基、灯籠の基礎2基、鳥居（ただし、倒れたまま）、手水鉢などが残存しているが、それぞれの痛みは激しい。

4. 北マリアナ諸島・テニアン島に残存する構造物^{5), 8)}

4.1 サン・ホセ地区に残る建築物とその遺構

テニアン島は、北マリアナ諸島を構成する島のうちの一つであり、サイパン島の対岸に位置する。テニアン島南部の集落サン・ホセ（後に、テニアン村が設置された）では、南洋興発が1930（昭和5）年に第一工場を建設し、次いで1934（昭和9）年には第二工場を建設した。その結果、公称能力としてはサイパン工場を上回る製糖工場となった（写真-21、写真-22）。これらの工場は、月島機械が主導して建設された⁹⁾。海沿いに建てられたこの工場の北東側（山側）には、チャランカノアと同様に、多くの社宅（写真-20）や病院、倶楽部などが建ち並んでいた¹⁰⁾。

これまでの調査で、表-2の様な建築物とその遺構が残存していることが明らかになっており、そのうちの幾つかを実測し、図面を作製した。これらのうち、現在も使用されているものは少なく、調査時には樹木に覆われて、外部からはその様子を知ることが難しいものもあった。

4.2 その他の構造物

サイパンと同様にテニアンも、第二次世界大戦末期には、絶対国防圏の一翼を担ったこともあり、島内には旧海軍送信所や第一飛行場関連施設などの各種の軍事施設のほか、神社なども残っているが、筆者は未見である。

5. 北マリアナ諸島・ロタ島に残存する構造物^{5), 11)}

ロタ島も、北マリアナ諸島を構成する島のう

表-2 サン・ホセに残る建築物と遺構

種別	構造	残存棟数	実測	写真
高級官舎	木造+RC造	1	×	
官舎	木造+RC造	1	×	
テニアン小学校	RC造	1	○	17
テニアン出張所跡	RC造?	1	×	
テニアン町役場跡	不明	1	×	
テニアン消防組	RC造	1	○	18
テニアン警防団	S造+RC造	1	○	19
所長社宅*	木造+RC造	1	○	20
高級社宅*	木造+RC造	5	×	
製糖工場・事務所	RC造	1	○	21
製糖工場・糖度分析所?	RC造	1	○	22
南洋水産?・冷蔵庫	RC造	1	×	
水タンク	RC造	8	×	

*: RC造の応接室のみ現存



写真-17 テニアン小学校



写真-18 テニアン消防組



写真-19 テニアン警防団



写真-20 所長社宅



写真-21 工場・事務所



写真-22 工場・糖度分析所

ちの一つであるが、サイパン島とテニアン島よりもグアム島に近い位置にある。ロタ島南部の集落ソン・ソンでは、南洋興発が1935（昭和10）年に製糖工場を建設したが、製糖の成績不良のため、1940（昭和15年）には合成酒工場に転換された。また、ロタ島には島中央部のサバナ高原で産出した燐鉱を処理する工場も建設された。

ソン・ソン地区に残る建築物とその遺構のうち、主なものは、製糖工場（のち合成酒工場）汽罐室跡と煙道跡（共に煉瓦造、写真-23）、南洋興発ロタ病院（RC造平屋建、写真-24）な

どである。汽罐室跡からは品川白煉瓦製の耐火煉瓦が発見され、当時の建設資材が内地から移入されていたことが裏付けられた。汽罐室跡と煙道跡は年と共に崩壊が進んでいる。また、ロタ病院は、戦後の一時期、校舎として利用されていたが、現在は使用されていない。

なお、ソン・ソン地区以外のロタ島内には、少なくとも幾つかの建築物や軍事施設の遺構、ならびにトーチカまたは砲台跡などが残存しているが、一つを除いて筆者は未見である。

6. パラオ共和国に残存する構造物^{12), 13), 14), 15)}

6.1 コロールに残存する建築物とその遺構

現在のパラオ共和国コロール州には、日本統治時代に南洋庁が置かれ、南洋群島全体の政治の中心であった。そのため、群島内でも規模の大きな公共建築物が数多く建設され、現在でもそれらが残存している。図-2に、これまでの現地調査で判明したコロールに残る日本統治時代の建築物とその遺構を示す。そのうち、主なものは、以下の通りである。

(1) パラオ無線電信所庁舎(現 パラオ国会議事堂, Palau National Congress (OEK, Olbiil Era Kelulau) Building, 写真-25)

煉瓦造2階建。設計者は横須賀海軍建築部と推定され、1923(大正12)年に建てられた。現在パラオに残る最も古い日本統治時代の建築物と考えられる。

(2) 南洋庁パラオ支庁庁舎(後に西部支庁庁舎, 現 パラオ最高裁判所庁舎, Palau Supreme Court Building, 写真-26)

RC造2階建(一部地下1階)。設計者は南洋庁土木課技師の山下彌三郎と推定され、1938(昭和13)年頃または1939(昭和14)年頃に建てられた。

(3) 南洋庁観測所庁舎(旧庁舎)(現 ベラウ国立博物館旧館, Belau National Museum Old Building, 写真-27)

RC造2階建。設計者は不明であり、1929(昭



写真-23 製糖工場跡



写真-24 ロタ病院

和4)年(ただし、一部は1929(昭和4)年以前)に建てられた。1929(昭和4)年以前に建てられた部分は、パラオに残る最も古いRC造の建築物と考えられる。

(4) 南洋庁気象台庁舎(新庁舎)(現 社会・文化省芸術・文化局庁舎, Bureau of Arts & Culture, Ministry of Community and Cultural Affairs Building, 写真-28)

RC造2階建(ただし、2階部分の大半は木造)。設計者は前述の山下彌三郎と推定され、1938(昭和13)年頃から1944(昭和19)年頃の間建てられた。

(5) 海軍無線通信所(現 資源開発省土地測量局庁舎, Bureau of Lands & Surveys, Ministry of Resources & Development Building, 写真-29)

RC造平屋建。設計者は第四海軍建築部と推定され、1938(昭和13)年頃から1944(昭和19)年頃の間建てられた。

(6) 南洋庁パラオ医院(現 パラオ・コミュニティ・カレッジ事務棟, Palau Community College Administration Building, 写真-30)

RC造平屋建。設計者は不明であり、1931(昭和6年)頃から1934(昭和9年)頃の間建てられた。

(7) 日本統治時代の用途不明の建築物(現 財務省国家財務局庁舎, Bureau of National Treasury, Ministry of Finance Building)

RC造平屋建。設計者と建設時期はともに不明である。

(8) その他

これらの他に、大日本航空の社宅(推定、木造, 写真-31)なども確認した。また、戦時中

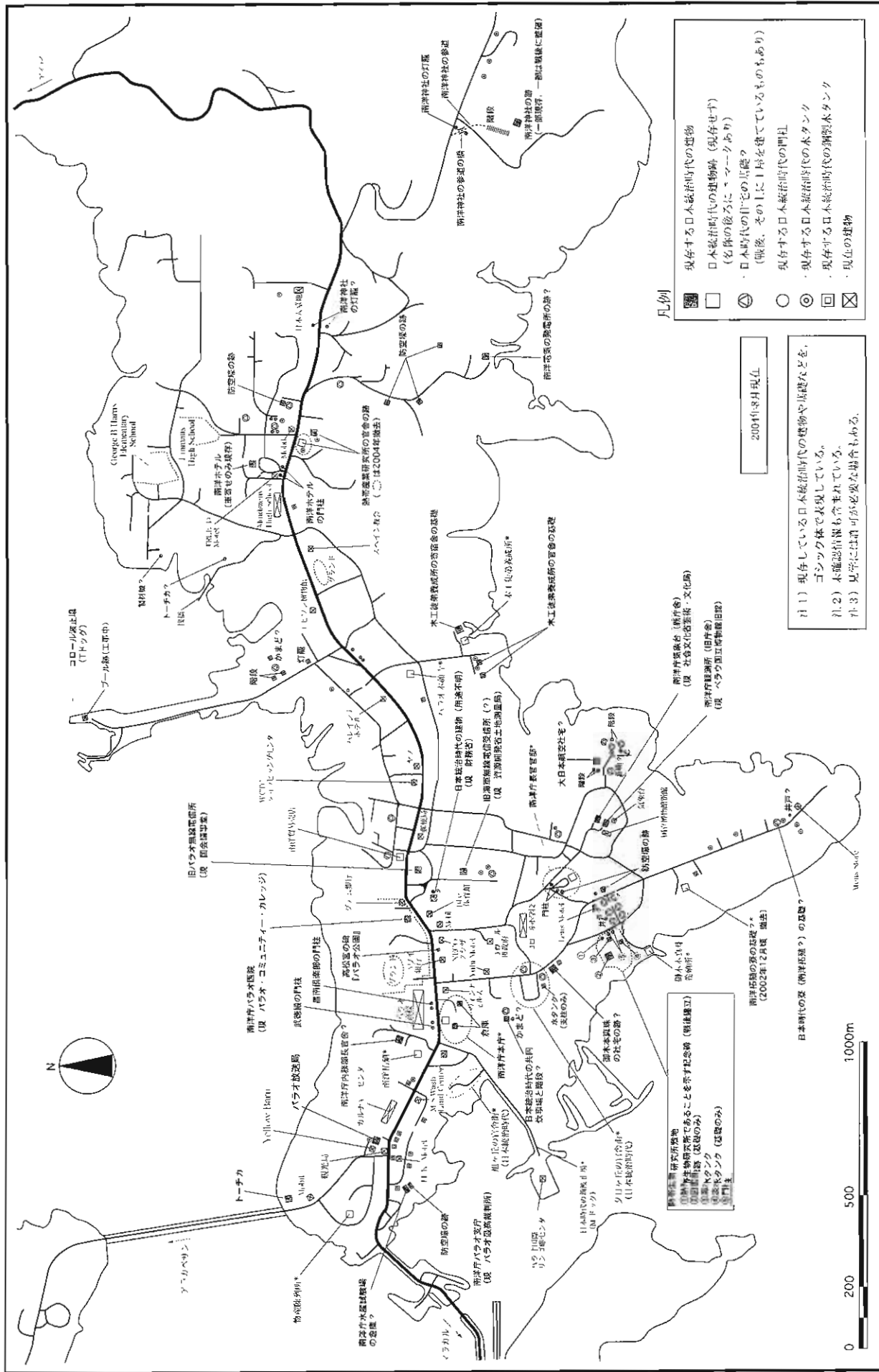


図-2 パラオ共和国・コロロールに残存する建築物とその遺構

の爆撃などで上屋が失われたものの、現在でも数多く残ったままの日本統治時代の官舎や住宅の基礎を利用し、新たな上屋を建てて居住している事例が数多く見られた。さらに、当時世界最先端の珊瑚礁研究を実施していたパラオ熱帯生物研究所（日本学術振興会傘下）の研究室（大実験室）の基礎、新実験室の基礎、畑井記念図書室の基礎と玄関ポーチ、門柱（写真-32）、海水タンク、淡水タンク、船着き場（写真-33）なども確認できた。現在は、研究室の基礎、新実験室の基礎を利用して RC 造平屋建の上屋が建てられ、住居として利用されている。

コロールの市街地に残る日本統治時代の建築物やその遺構は、何らかの形で利用されていることが多く、アクセスが可能なことが多い。その意味では、放置されたままであることが多い北マリアナ諸島における日本統治時代の建築物とその遺構に比べて保存状態が良いと言えよう。ただし、コロールの場合でも、使用されていない遺構の場合は、保存状態は決して良いとは言えない。例えば、コロールの東端に残存する南洋電気の発電所跡（推定、煉瓦造2階建、写真-34）の外壁は植物に覆われ、至る所にクラックが入っている状態である。

6.2 コロールとその周辺に残存するその他の構造物

前述のように南洋群島の政治の中心地であったパラオ・コロールでは、インフラの整備も進んだ。例えば、コロール波止場や新波止場が整備され、当時と全く同じ姿ではないが、現在も残っている。コロール波止場には海水プールが設けられ（写真-35）、現在は使用されてはいないが、その姿を留めている。また、コロール島からアラカベサン島、またはマラカル島へと続く道路も日本統治時代に整備され、現在でも、両島への重要な通行路となっている。なお、アラカベサン島へ続く道路は2006年10月訪問時には改修を行っていた。

海軍を中心とした軍事施設も数多く残ってい

る。コロール島からアラカベサン島へ続く道のコロール側の先端にはトーチカ（写真-36）が残り、コロールの中でも少なくとも数個の防空壕が残存している。また、アラカベサン島には、特に多くの軍事施設が建設され、水上飛行機の基地跡などが残存している。

また、群島内で最も大きな神社である南洋神



写真-25 国会議事堂



写真-26 最高裁判所



写真-27 博物館旧館



写真-28 芸術・文化局



写真-29 土地測量局



写真-30 PCC



写真-31 大日本航空社宅



写真-32 熱帯生物研究所跡（門柱）



写真-33 熱帯生物研究所跡（船着き場）



写真-34 南洋電気跡



写真-35 コロール波止場



写真-36 トーチカ

社関連の施設の一部とその遺構も残存している。南洋神社は、内務省神社局造営課指導のもと、小林建築事務所（東京）が設計し、1940（昭和15）年8月に竣工した¹⁶⁾。また参道などに数基の灯籠も残っている。

その他、各所に多数の水タンク（鋼製またはコンクリート製）が残り、そのうちの一部は現在でも使用されている。

6.3 パラオのその他の地域に残る構造物

日本統治時代のパラオでは、コロール島、マラカル島ならびにアラカベサン島に多くの人口が集中していたため、これら3島に多くの構造物が残存しているが、その他の地域にも様々な構造物とその遺構が残存している。

コロール島の北に位置するバベルダオブ島（パラオ本島、または本島とも呼ばれる）でも、例えば次のような遺構などが現存する。アイライ州に残る国際電気通信が建設した無線送信所、ガスパン州に残る国際電気通信の鉄塔（倒れたまま）、マルキョク州に残るマルキョク公学校跡、ガラスマオ州に残るボーキサイト工場関連施設跡、などである。ただし、これらの遺構については、筆者は未だ十分な調査を行うことができていない。

また、第二次世界大戦中の激戦地であったペリリュー島とアンガウル島にも多数の軍事施設とその遺構などをはじめ、様々な構造物とその遺構が残存していると言われるが、筆者は未見である。

7. ミクロネシア連邦に残存する構造物

7.1 ヤップ州に残存する構造物¹⁷⁾

現在のミクロネシア連邦ヤップ州のヤップ本島中央部の集落コロニアには、日本統治時代には南洋庁ヤップ支庁が置かれており、現在もヤップ州の中心である。コロニアには、2002年7月の調査当時、少なくとも1戸建官舎（RC造平屋建、写真-37）2棟、2戸建官舎（RC造平屋建、写真-38）2棟が残存していた。これ

らの官舎は1926（大正15）年から1928（昭和3）年頃に建てられたもので、未だ確証はないものの日本またはその影響下にあった地域における最も古いRC造官舎のうちの一つであると考えられる。調査当時は、それぞれ1棟ずつが大幅な改修や増築の後に住宅として利用されていた。また、使用されていない1戸建官舎の周囲は樹木に覆われ、容易に近づけない状況であった。

また、ヤップ本島北東部の集落マキでは、マキ公学校の校舎の基礎（写真-39）とその官舎の基礎2棟分を確認し、実測することができた。さらに本島北部の集落ガチャパルでは、派出所の基礎（写真-40）を確認し、実測することができた。いずれもジャングルの中に位置し、容易に近づくことができない状況であった。

7.2 その他の州に残存する構造物

現在のチューク州のデュブロン島は、日本統治時代には夏島と呼ばれ、トラック支庁が置かれていただけでなく、海軍第四艦隊や連合艦隊の司令部も置かれた。2001年7月の訪問時でも、島内には、海軍病院の基礎（写真-41）をはじめ各種の軍事施設の遺構やトラック公学校校舎跡（写真-42）などが残存していたが、詳細に調査するには至っていない。今後の課題である。

また、現在のポーンペイ州のポーンペイ島には、日本統治時代にはポナペ支庁が置かれていた。2001年7月の訪問時には、南洋貿易の売店



写真-37 1戸建官舎



写真-38 2戸建官舎



写真-39 マキ公学校跡



写真-40 派出所跡

(RC 造平屋建, 写真-43) や熱帯産業研究所ポナペ支所 (RC 造3階建, 写真-44) の残存を確認することができた。島内には, この他にも遺構が残存していると推測されるが, これらの詳細な調査は今後の課題である。

8. まとめと今後の課題

本報告では, 第二次世界大戦終戦前までの約30年間, 日本の影響下または統治下にあった南洋群島における歴史的建造物の現況を, 筆者らのこれまでの研究成果に基づき, 整理した。具体的には, 北マリアナ諸島のサイパン島, テニアン島, ロタ島, パラオ共和国のコロール島とその周辺, ならびにミクロネシア連邦ヤップ州, チューク州, ポーンペイ州に残る日本統治時代の建築物を中心にその他の建造物とそれらの遺構について, 主に焦点を充てて言及した。

終戦前までは南洋群島であり, 終戦後はアメリカ信託統治領として, ひとつのまとまりを持っていたミクロネシア地域と雖も, 今日では4つの政治主体により統治されており, 日本統治時代の建造物に対する扱いも, 地域によって大きな差がある。これらの建造物の保存を担当する各政治主体の歴史保存局の組織や取り組みにも差が見られる。しかし, これらの中では比較的組織が充実しており, 活動も活発な北マリアナ諸島と雖も, すべての建造物とその遺構について記録を作成し, 診断した上で, 修復作業を行っている訳ではない。むしろ記録さえない場合が多い。

日本統治時代に政治の中心であったために, 比較的規模の大きい公共建築物が多数建設されたパラオでは, それらを現在でも政府機関が使用していることが多い。しかし, 近い将来首都の移転が予定されており, その際には, これらの建築物は空き家となる可能性が高い。現在は, 使用されているために比較的良好な保存状態を保っているものでも, 空き家となり野ざらしにされた場合, 熱帯の厳しい環境の中では, 急激

な劣化が進むと考えられる。また, 筆者らが調査を始めた後からでも, 例えば, パラオ・コロールに残っていた南洋拓殖の独身寮跡 (推定, 基礎のみ, RC 造, 写真-45) が完全に取り壊され, その上に建てられた新しい住宅 (写真-46) を見るようになった。

歴史的な建造物は一度取り壊されると, または崩壊すると, 同じ状態に戻すことは事実上不可能である。最終的に, 現地の方々が保存を選択するか否かはともかく, 早急な調査, 診断, そして必要な場合には修復を行うことが重要であると考えられる。



写真-41 海軍病院跡



写真-42 公学校跡



写真-43 南貿易店



写真-44 熱研支所



写真-45 南拓の独身寮跡の基礎



写真-46 基礎を取り壊して新築された住宅

付記

本報告のほとんどの部分は, 今村仁美 (アトリエイマージュ) との共同研究の成果である。

また, 本報告は, 次のような援助を受けてなされた研究の成果の一部である。平成12年度熊本県立大学地域貢献研究事業 (学術高度化事業), 平成13~14年度科学研究費補助金 (奨励研究 (A), 若手研究 (B), 課題番号13750557), 平成13年度 (第39回) 三島海雲記念財団学術奨励金, 平成16~17年度科学研究費補助金 (若手研究 (B), 課題番号16760520), 平成17年度住宅総合研究財団研究助成。

資料収集では, 特に次の方々のご協力を頂きました。

アジア会館アジア・太平洋資料室 山口洋児様，太平洋学会専務理事 中島洋先生，戦没した船と海員資料館（当時）上澤祥昭様，山下三長様，片山節義様，その他関係者の皆様。

北マリアナ諸島では，特に次の方々のご協力を頂きました。社会文化省歴史保存局副歴史保存官（当時）Lon Bulgrin 様，同歴史官 Genevieve S. Cabrera 様，同テニアン駐在 Carmen A. Sanchez 様，同ロタ駐在 Eloy M. Ayuyu 様，ならびにスタッフの皆様と快く実測調査をお許し頂きました関係者の皆様。

パラオでは，特に次の方々のご協力を頂きました。オーシャニック・ワイルドライフ・ソサエティ副会長 倉田洋二先生，在パラオ日本大使館専門調査員（当時）小川和美様，同（当時）三田貴様，パラオ・コミュニティ・カレッジ学長 Patrick Ubal Tellei 先生，同副学長 Jay Oiegerill 様，ベラウ国立博物館館長 Faustuna K. Rchuer 様，同訪問研究員 三田牧様，在パラオ青年海外協力隊員 村井展子様，同 山口孝彦様，ならびに快く実測調査をお許し頂きました関係者の皆様と各所のスタッフの皆様。

ヤップでは，ヤップ高校 大橋旦先生のご協力を頂きました。

その他，関係者の皆様方に，篤く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 南洋庁長々房：南洋庁施政十年史，南洋庁長々房，1932.7
- 2) 矢崎幸生：ミクロネシア信託統治の研究，御茶の水書房，1999.9
- 3) 小菅輝雄編著：南洋群島 今昔，p.10，1977.5
- 4) 辻原万規彦，今村仁美，香川治美：サイパン・チャランカノア地区に残る日本委任統治時代の建築物（1）－戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その6－，日本建築学会関東支部研究報告集 II，第73号，pp.453～456，2003.3
- 5) Cabrera. G. S.: Historic and Cultural Sites of the CNMI –The National Register Sites–. CNMI Division of Historic Preservation Office. 2005
- 6) 武村次郎編著：南興史，南興会，1984.5
- 7) Denfeld, D. C. and Russell, S. : Home of the Superfort: An Historical and Archaeological Survey of Isely Field, Micronesian Archaeological Survey Report Number 21, Office of High Commissioner, Jul. 1984
- 8) 辻原万規彦，今村仁美，香川治美：テニアン・サンホセ地区に残る日本委任統治時代の建築物（1）－戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その7－，日本建築学会関東支部研究報告集 II，第73号，pp.457～460，2003.3
- 9) 創業100周年記念事業社史編纂委員会編：月島機械百年の経営，月島機械，2005.6
- 10) 沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編：沖縄県史ビジュアル版9 近代2 旧南洋群島と沖縄県人-テニアン-，沖縄県教育委員会，2002.2
- 11) 辻原万規彦，今村仁美：ロタ・ソンソン地区に残る日本委任統治時代の建築物- 戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その10- ，日本建築学会九州支部研究報告，第43号・3 [計画系]，pp.585～588，2004.3
- 12) 辻原万規彦，今村仁美，香川治美：パラオ・コロールにおける日本委任統治時代の建築物の残存状況と旧パラオ支庁庁舎- 戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その8- ，日本建築学会九州支部研究報告，第42号・3 [計画系]，pp.609～612，2003.3
- 13) 辻原万規彦，今村仁美，香川治美：旧パラオ医院本館と旧南洋庁観測所および気象台庁舎について- 戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その9- ，日本建築学会九州支部研究報告，第42号・3 [計画系]，pp.613～616，2003.3
- 14) 辻原万規彦，今村仁美，岡本孝美：パラオにおける日本委任統治時代の建築物に関する2003年と2004年の調査- 戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その11- ，日本建築学会九州支部研究報告，第44号・3 [計画系]，pp.749～752，2005.3
- 15) 熊本県立大学辻原研究室：ベラウ国立博物館開館50周年記念特別展示-パラオの日本建築文化-，会場：パラオ共和国ベラウ国立博物館，会期：2005年9月30日～2006年3月31日
- 16) 南洋神社奉賛会：官幣大社 南洋神社造営誌，南洋神社奉賛会，1940.11
- 17) 辻原万規彦，香山梢，今村仁美，平川真由美：ヤップ島に現存する日本委任統治時代の建築物（1）－戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その3－，日本建築学会九州支部研究報告，第41号・3 [計画系]，pp.413～416，2002.3